

ひらいた門

見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。 黙示録 3 : 8

VOL.01-08 NO.008 2009年11月

チャーチ・オブ・ゴッド

川崎南部キリスト教会

〒210-0025 川崎区下並木66

TEL&FAX 044-233-3648

Eメール：nanbu-kyokai@nifty.com

URL：<http://homepage2.nifty.com/nanbukyokai/>

愛の労苦

橋本幸夫

「絶えず、私たちの父なる神の御前にあなたがたの…愛の労苦…を思い起こしていません。」
(Iテサロニケ1:3)

〈それは忘れもしない1940年7月末の日であった。6時少し前、表通りに面した領事館の門前が、突然人のやかましい話し声で騒がしくなり、意味の分からぬわめき声が高まった。人数が増えたためか次第にその声は激しくなっていく。わたしは急いでカーテンの透き間から外をうかがった。なんとそれは、大部分が乱れた服装をした老若男女の群れで、いろいろの人相の人々がざっと100人近くも領事館の鉄柵に寄り、争ってこちらに向かって何かを訴えている光景が目映った。〉

(「夫・杉原千畝^{ちうね}の手記」より)

杉原さんは当時リトアニアで、日本を代表する領事の役を務めておられました。領事館の鉄柵に寄りかかって、助けを求めていたのは皆ポーランドのユダヤ人でした。杉原領事は外務省の命令と自分の良心の声との選択の板挟みになり、夫人とよく相談しました。

クリスチャンでもあった彼は、祈りつつ良心と神に従うと決断を下したのでした。

こうして100人の人でも大変なのに

6000人以上のユダヤ人のために、ビザを発行し手渡したのです。手が棒になるまで…。この証明書でこのユダヤ人はシベリア鉄道を利用して、東洋に渡りほとんど命びろいしました。当時の日本の政府もナチスの要求にもかかわらず、極東に非難したユダヤ人難民をナチスのもとへ引き渡しませんでした。

領事が終戦後帰国した際、外務省はリトアニア事件を忘れず、彼を外交官のリストから削除してしまいました。

でも1984年にイスラエルの政府は彼に〈国家の偉大な恩人〉の勲章を授け、ニューヨークでも領事に救われたユダヤ人は彼の名前で奨励制度を創立しました。

杉原千畝は1986年に人知れず亡くなりました。1991年に、日本の政府もやっと彼の夫人と家族に謝罪の手紙を正式に届けました。彼の外交官としての資格を剥奪したことで…。

夫人杉原ゆきこは〈命のビザ〉と題する本の中にリトアニア事件をくわしく述べています。救われたユダヤ人は口をそろえて〈杉原千畝は神からの使者でした〉と語っています。これが愛の労苦です

愛の労苦とは、燎原の野火のようにどこまでもどこまでも燃え続けていくものではないでしょうか。